

---

NecessaryCorkscrew

## 必然的な螺旋階段

ひつぢ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Necessary Corkscrew

必然的な螺旋階段

### 【Nコード】

N9646D

### 【作者名】

ひつぢ

### 【あらすじ】

死神の少女と半人半妖<sup>ダンピール</sup>の少年や聖獣たち。彼らが出会ったことは必然。神々の意志もまた必然なのか

**\* P r o l o g u e \* (前書き)**

この小説に興味を持ってくださり、ありがとうございます。  
はじめの方は普通なのに、後々ぐろくなりそうで怖いな…。  
でも、とりあえず読んでください!!!

感想・指摘等いただけたら嬉しいです!!!!!!  
いや、嫌だったらいいんですよ?

ただ私が寂しくて死んじゃうだけですから。。。

兎かよッ!! (一人ボケツツコミ・・・)

\* P r o l o g u e \*

「えつと、あなたの死んだ日は4月27日ですから・・・ああ、  
今からあなたには神と人との中立の者、死神になってもらいますね」

「え、あ、・・・・・・・・え？」

・  
・

そこは、神聖な光がすべてを包む、無限の空間。

その一角に、濃い闇色の短髪に、フードの付いた漆黒のコートを羽  
織る少女がいた。

少女の二度目の記憶の始まりはここ      神の住まう町。通称ゴッ  
タウン

通り名は『悪魔に近し神』。

彼女の忠実な性格が周囲には冷酷さに見えるらしい。

本当の名は【刹離 セツリ】といった。

余談だが、状況を把握できていない状態で、突然語呂合わせで彼女  
の職を決めた審判の神の顔は、  
彼女の記憶に深く刻まれている。



\* P r o l o g u e \* (後書き)

登場人物

名前：刹離 セツリ

性別：女

髪：黒の短髪

瞳：深い紺色

服装：黒が基調ならなんでもよし

性格：冷静で忠実

身長：164センチ

体重：48キログラム

足：23.5センチ

武器：基本は死神の鎌  
デスサイズ

特徴：古めかしい喋り方。据わった目をしている。

他の死神より遙かに強い力を隠し持っている。

一言：いつか審判の神に闇討をしようと思うのだが、貴方も一緒に  
どうだ？

あ、我へのファンレターはいつでも待っているぞ！！

## 第1話 全てが終わり、始まった日

「リ、剝離!!」

「ん？あ、すまん。で、なんだ？」

雷撃の神であり、剝離の友人であるジェスが肺が空になるほど大きなため息をつく。

死神の基本の服装である漆黒のコートとは対照的に、ジェスの衣装には多くの神岩がついている。

神岩とは、神本来の力を引き出し、融合の時に、よりシンクロ率を上げるものを指す。

ジェスの例としては、審判の神と融合し「審判の雷 ジャスティス」となることが可能だ。

神岩は、例外を除いて、ほとんどのモノが美しく光り輝いている。雷撃を髪と瞳の色に宿し、性格の明るいジェスは、神岩によってさらに明るい印象がある。

「もー、聞いててよねっ!!今日の仕事は四人までよ!!ちゃんと稼いで、一人で仕事の内容把握しなさいよね!!!」

剝離のゆつたりとした返答が気に食わなかったのか、頬を膨らませるジェス。

そんなジェスの反応を全く気にするそぶりもない剝離。

「承知している。強い守護獣は式にする。だから、タウンで待つていいぞ」

守護獣とは、生まれながらに多少なりとも魔力を秘めている人間についている、いわば守護霊のようなもの。

それが、主人の魔力に応じてチカラを持ち、獣化したものを守護獣という。

一般的な守護獣は、主人と関わることはなく、ただ守るという本能を全うする獣である。

「まったくもう!魔力の強い人間に式に下されても知らないんだか

ら！！！」

ジェスの姿が徐々にノイズ感を帯び、掻き消える。

「どうせ映像だけなのに、心配症というのも困りものだな・・・」

刹離が顎に手を添えてうーんと唸った。

夜の風が刹離の短い黒髪を不気味に撫でる。

「さて、今日のノルマは四人か・・・」

人界に降り、一際高い高層ビルのでっぺんから下界を見下ろす刹離。ふと夜風が強くなった。

月明かりに照らされた刹離の影の横に、風と共にフツと小柄な影がひとつ顕現した。

時間がない、夜が明ける前に早く狩るぞ

幼い少年のような声のそれは、大きめな猫のような体だが、耳は長く、狼のような尾をしている。

背中には漆黒の翼があり、瞳は深い夜色をしている。名を【刹羅セツラ】という。刹羅は、人間につく守護獣とは違い、刹離に仕える式である。

式は、チカラのあるものであれば、主人と言葉を交わしたり、融合することができる。

刹羅の場合は、融合するには人型に変化しなければならぬため、滅多にすることはないが、式として呼ばれなくとも自分の意志で顕現することが可能なのだ。ここまでいけば、かなりランクの高い式であることは確かだ。

「うむ。では、あそこからいこうか。」

刹離と刹羅は高く飛び、人影のない路地に向かっていく。

月の前にあった二つの影が羽音とともに消える瞬間、刹離のコートが翻り、鋭く光る刃物の切先が月光に反射した。



「一人目・・・」

刹離は死神の武器、デスサイズに寄りかかり、刹羅と守護獣の戦闘を眺めていた。

はつきりいつて勝負になっていない。刹羅が圧倒的に強すぎるのだ。「なんだか弱いからいらぬといわれそうだな・・・」

刹離は戦闘を見て何気なく刹羅の次の言葉を予想した。

弱いな。魔力が弱すぎる。これはいらぬ

刹羅は吐き捨てるように言い、高く跳躍する。

今にも消滅しそうなほどの守護獣に向けて、刹羅の羽が一本放たれた。

見事、それは守護獣の急所である額に命中した。

刹離よ。早急に人間を狩れ。次へ行く

「承知。（予想通りの言葉が来るとは・・・）」

何故か上から物を言う刹羅を横目に、刹離はデスサイズを両手で構えた。

呼吸を整え、獲物を見据える。

「では、人間。魂、頂戴す・・・るッ！」

語尾のところで思いつきデスサイズを振り下ろす。

「う・・・」

人間は、小さなうめき声を漏らしたが、それきり動かなくなった。人間たちの間では、死神に狩られた者の死因を「心臓麻痺」と呼んでいるらしい。

デスサイズは、人間の身体を斬らずに魂だけを斬るものなのだ。

その種類は実に多種多様で、刹離のものは全体的に細く、一見とてつもなく弱そうに見える。

しかし、実際は刹離以上の神通力と魔力を合わせ持つ死神など、いるかわからない。

刹離、次はこいつを狩っておけ。守護獣は消滅させた

「むむ、刹羅、ペースが早すぎるぞ」

先ほど斬った人間の魂を捕まえ、意識を集中させ、ふっと息を吹き掛ける。

すると、魂に鋼の鎖が一瞬にして巻きつけられ、するすると上へ上って行った。

こうすることで、魂を上を送り、稼いだことになるのだ。

この時に魂を捕まえ忘れると、魂の匂いを嗅ぎつけて、雑鬼や悪魔たちが寄ってきてしまう。

雑鬼や悪魔たちに喰われた魂は、それらの【負】の力に影響され、それもまた雑鬼が悪魔に変わってしまう。

そういったところで、死神は人間の命を拾い集めて天界と人界と冥府の均衡を保っているのだ。

これが、死神が『神と人との中立の者』と呼ばれる所以なのである。

斬ッ！

刹離は再び人間の魂を狩り、同じく息を吹きかけた。

二人目、狩り終了

## 第1話 全てが終わり、始まった日（後書き）

登場人（？）物

名前：刹羅 セツラ

性別：

毛：黒褐色

瞳：夜色

服装：獣ですから

性格：冷静且つ冷酷

身長：46センチ

体重：25キログラム

足：7センチ

武器：翼、爪、牙、等々

特徴：刹離と似た喋り方。

いつも刹離の傍らにいるが、真の姿は不明。

一言：我は刹離とともにあるのみ。容姿のことは何も言つなよ。

刹離がこの方が可愛いと言って笑ってくれたからこうしているだけだ。

## 第2話 全てが終わり、始まった日2

「二人目も弱かったな。次はどれにしようか・・・」

徒人には刹離と刹羅の姿は視えないので、上空からどれを殺すか選んでみている。

「・・・ん？」

どうした

「あれは強くないか？」

刹離の指さす方向を見ると、先ほどまでいた路地に沿ったこれまたさらに人影のない大きな公園に、淡く輝く人影があった。

魔力のあるものは、神々の瞳には必ず輝いて見える。魔力が強いものほど、それは美しい輝きとなるのだ。

今公園にいる人間はかなりの大物だ。

あの輝きは、神父が人間に化けている聖獣でなければありえない。今回の場合、後者ではないことは絶対だ。

刹羅は光り輝くその姿を確かめると、不適な笑みを浮かべた。

ほう。少しは骨がありそうだな

と呟き、人間の横につく守護獣の方へと降下していった。

レジア様、珍しい者がいますよ。死神・・・いかがいたしますか？

「ん？強くてかわいかったら式にする」

レジアと呼ばれた青年は、調子よく答えた。  
肩より少し長めの銀色の髪に、動きやすさ重視の白を基調とした服を身にまとっている。

整った綺麗な人間らしい容姿とは対照的に、瞳には獣のような鋭い光を宿していた。

・・・レジア様・・・

青年の横にいる影が溜息を深く吐いた。

バサッ

刹羅の翼のはためく音が、夜の静まりかえった公園に響いた。

ほう。主人と言葉を交わすか。守護獣ではないな？悪魔か、否、聖獣か？

私はレジア様に仕える聖獣、ヘレス。龍鳳族の聖獣です  
ヘレスと名乗った聖獣の姿は、とても美しいものだった。  
龍の胸に鳳凰の翼。瞳は深い海を映した蒼緑をしている。

「刹羅、こいつら、普通ではないぞ。あの人間の魔力に獣の禍々しさが混ざっておる」

しばらく相手の魔力を探っていた刹離がその場に舞い降りた。  
少し前に出ていた刹羅が刹離の横につく。

死神のお前が言うか、刹離。神通力はお前が上だ。奴に勝機は

刹羅は唐突に言葉をきった。

刹離と刹羅の目の前でレジアと呼ばれた青年が魔法を成していたのだ。

『我が名レジアの名の下、集え我が式。召喚悪魔【レウィー】今こそ我に力を分け与えよ』

レジアが空に魔方阵を描き、息をかけた。

その間、刹羅はただただ驚愕していた。  
今まで魔力のある人間は何人も狩ってきた。その大半は我々の姿すら視えていなかった。

視えたとしても、抵抗することすらできずに狩られていった。

しかし、こいつはダンピールの人間型。

ダンピールはそうそう生まれてはこないが、珍しい分霊力が強い。  
だから魔法を使うことなど不思議ではない。

その魔法が問題だ。

召喚魔法というだけでもたちが悪いのに。

さらに、召喚悪魔レウィーは、上級の者しか契約をかわせないAランクの悪魔だ。

召喚悪魔レウィーがAランクとなった理由が少々厄介だ。

刹離はまだレウィーと対峙したことがない。だからきっとそれを知らないだろう。

これは……勝負が見えたな

ひゅんっ

思考を巡らせていた刹羅を、耳元で唸った風が現実へ引き戻した。

刹羅といいましたか？あなたの相手は私がさせてもらいます

はっ、下衆が

刹羅とヘレスの戦いの火ぶたが切って落とされた。

レジアの周りに夜のやみより深い闇が現れ、その中から悪魔が現れた。

あつしをお呼びですかい？ご主人

「おう、あの死神の子、式にしちゃってくれ」

あいよ

刹羅とヘレスの横を一陣の風がすり抜けた。

直後、甲高い金属音が響き渡る。デスサイズとレウイーの魔刀がぶつかったのだ。

レウイーはぶつかった反動で後ろにはねる。

一足早く態勢を立て直した刹離が強く踏み込み、斬りかかる。そのままレウイーに攻撃させる隙を与えない。

「おおつ、俺の式の中でも結構戦闘力の高いレウイーに勝るか」。

これは欲しいなあ」

戦闘に全く参加しないレジアが騒ぐ。よし、とレジアは一つ頷いた。

「もうやっていいよ、レウイー」

やるって、何をだ？

刹離が少し考える。

そんな刹離の隙をレウイーは見逃さなかった。

召喚悪魔レウイー、特殊能力「強制契約」発動

刹那、レウイーの掌が刹離の額に当てられた。

「っ　　・・・」

咄嗟に数歩後ろに下がり、再びデスサイズを構えた

・・・はずだった。

刹離の意に反し、デスサイズが突然消え失せる。

デスサイズは刹離の意志で出現するのだ。そのデスサイズが戦う気

満々の刹離の手から無くなった。

「なっ・・・デスサイズが・・・出せ・・・ない・・・」

「当り前じゃ〜ん。主人の召喚した仲間にも刃を向けることができるわけないでしょ〜」

「・・・は？」

現状が把握できず、呆けている刹離の頬を刹羅の尻尾がぺちりと叩いた。

お前が奴の式に下ってしまったということだ。召喚悪魔レウィーの能力は、強制的に相手と自分の主人の関係を主従関係にさせるもの。刹離の式である我も結果的に奴の式、ということになる

「そーゆーこと」

死神という式を手に入れて上機嫌のレジアが笑顔で応えた。

ダンピールよ。死神の仕事・・・狩りを放棄した場合死神が消滅することくらいは知っているであろう。狩りを邪魔した者も、最高神ゼウス等によって裁かれる。それを承知の上か

刹羅の灰黒の瞳がざらりと光った。

抑えてはいるものの、刹羅から僅かながら殺意を感じられる。

「あ、大丈夫。俺の職業なら両立できるから。それなら俺の式になれるだろ？」

選択の余地もないのにわざと疑問形にしてくるレジア。

刹離はがっくりと首をうなだれ、その場に膝をついた。

「そんな・・・ジェスよ、お前の言う通りになっちゃったぞ・・・」

「

真夜中の公園に刹離のため息が響いた。

「まあまあ、そんなにおちこむなって！！これからよろしくな！」  
小さくなる刹離にレジアが明るく言う。

「俺の名はレジア。妖怪と人間との間の子だ。よろしく」

にこやかに手を差し伸べるレジアを上目づかいに刹離が見つめる。  
刹離は数秒その手を取るか迷ったが、一つ頭を振って言った。

「私の名は刹離だ。職業は死神・・・そして今から副業としてレジ



ア、お前の式も勤めよう」

刹離はレジアの手を取り立ち上がった。

我々はあんなに死闘を繰り広げていたのに、当の主人がこれでは致し方あるまい

刹羅がため息交じりにヘレスへ向けて呟く。

そのようですね……。私どもは主人の意志に従うまでですから刹羅とヘレスはお互いに自分の主人を温かな眼差しで見守った。

\*\*\*\*\*天界の光りの届かぬ場所\*\*\*\*\*

アレエ？ナンカ、下界デ変ナコトガ起コツテル

【ソノヨウダナ。――、彼ノ神ハドノ

ヨウナ手ヲ打ツテクル？

ン？ 何ヲサレテモ、コツチニハアノ【ゴルゴン三姉妹】モイルカラ大丈夫ナンジャナイ

【天空ノ大神、ゼウス・ウラヌス】。ソ

コニ【アルテミス】ヤ【死神】マデ介入サレタラ？

サスガニソノ時ハ、滅ビト再生ノ道ヲ選ブよ

様モソウデシヨ？

フツ。我ガイナイト冥府ノ世ガ極樂浄土

ニ変ワツテシマウカラナ

神々の住まう町において唯一光の届かない場所に闇の神々が集結し  
つつあった。

闇の神々は話していた。

サア、祭りダ

ノ神々ノ祭りダ

我ラ、闇

叫べ、逃ゲロ、愚民ドモ

ラ、今ココニ集結シタリ

我

## 第2話 全てが終わり、始まった日2（後書き）

### 登場人物紹介

名前：レジア・ウォーヴィング

性別：男

髪：肩につくくらいの銀髪

瞳：蒼い。瞳孔が縦

向き

服装：白の動きやすさ重視

性格：軽い。何を考

えているか分らない

身長：174センチ

体重：64キログ

ラム

足：26センチ

武器：霊力、召喚

術、剣術、等々・・・

特徴：標準の表情が笑顔。母親譲りの蒼眼がお気に入りらしい。

強い妖怪などを式に下すことを趣味とし、霊的な事件等の仕事をしている。

一言：俺の自己紹介？んゝとね、俺へのファンレターは、二十四時間受け付け中だからね！！

それと、剝離に手エだした奴は、俺が優しく殺<sup>ヤ</sup>ってあげるからね（^^）

### 第3話 融合

人界において、人間型のダンピールの式に下った死神が一人

「納得いかぬ」

刹離がものすごく不服そうに言った。

「いーじゃないの！俺は魔力や霊が関係する問題を解決するのが仕事。俺が払った魂を刹離が狩る。悪い話じゃないし」（今頃覆しようがねえし）」

レジアの言葉に副音声重なった気がして少し頭にきた刹離だが、一つ咳払いしてレジアをにらんだ。

「それはいい。それはいいが、何故我が人間のふりをせねばならんのだ？！」

そう言った刹離の服といたら、死神などではなく、思いつき人間にしか見えない。

死神の翼も、レジアの施した術によって徒人には見えなくなっている。

「これから依頼者のもとへ向かうんだよ？依頼場所は大抵、憎悪や魔力が渦巻いてる。そんなところじゃ、いくら神通力のずば抜けた刹離でも、徒人の眼に映っちゃうからね」

ただ刹離で遊びたかったことなどばればれなのに、もっともらしいことを言っただけのけるレジア。

諦める。我も不服だが、こいつに従うしかない

「ほーら、刹離さんもこう言ってる」

「何故刹離は『さん』付けなのだ！そもそも私は……………」  
来る」

刹離は唐突に言葉を切って軽く身構える。

昼過ぎの明るい日の光が、何の前触れもなく薄暗くなった。もっとも、その暗さは徒人が味わえば確実に気絶するため、刹離たちには視えない。

刹那、淀んだ強風が一か所に集結し、不気味な赤黒い靄となった。

ザアアア・・・

赤黒い靄は、一時動きを止め、少しずつ加速しながら向かってきた。刹離の手にデスサイズが出現する。レジアは横に跳ぶと、刹離と靄を眺めた。

「さて、刹離ちゃん。お手並み拝見といこうか」  
レジアの口端が僅かに上がった。

斬ッ

赤黒い靄を中心から切り裂いた。  
だが、相手はやはり靄。

再び集結し、刹離に向かってくる。

刹離がそれを軽々とかわすと、靄はスピードを落とし、その場で全体を大きく蠢かせる。

「デスサイズで斬れず、さらに実体を持たないということは

誰かしらの意志によるものか・・・ならば」

刹離はデスサイズを消した。

「なっ　　！！」

デスサイズが刹離の意志で出現するものとわかっていたレジアは、

さすがに何をするのかと慌てた。  
慌てるレジアを気にした様子もなく、刹離は高く飛んだ。

「我は神と人との中立の者、死神。真の名【刹離】      ニンフの  
意志の精霊【フェアリア】よ。我との契約の下、我に応え      」

刹離が呪文を唱え終わると同時に、淡い緑色の光をまとった少女が  
フツと現れた。

久し振りに、刹離

栗色の長髪をなびかせながら、背に透き通った羽が四枚生えている  
小柄な少女が刹離に気の抜けた声をかけてきた。

「久しいな、フェアリア。突然ですまぬが、靄とその他もろもろ、一  
緒に殺してはくれないか？」

刹離の言うその他もろもろとは、靄の「負」の気に引き寄せられて  
集まった雑鬼どものことである。

フェアリアはニコツと笑うと刹離に手を出してきた。

刹離もそれに応え、手を握る。

《異なるモノの融合      B i f f e r   F u s i o n      》

刹離とフェアリアが同時に呪文を唱えた瞬間、光があたりを埋め尽く  
し、二人の姿が消えた。

直後、二人がいた場所には、レジア達には見覚えのない一人の女性  
らしきの姿があった。

ニンフ〓山野・河川・樹木・洞窟などの自然の精霊。美しい少女  
の形容。歌と踊りを好む。

斬ッ

レジア達の前にいる女性。

彼女の名は、【フォーリン】。

雑鬼の間では、【意志殺し mind kill】と恐れられている。

フォーリンの持つ鎌は、フェリアの淡い緑を映した、刹離の持っているものより細長いものだった。

この鎌は、『消滅の意志の波動』を放つことができる。

フェリアの能力、【意志の波動】に刹離の【滅】のチカラを上乗せするのだ。

「あと一体」

靄の【負の気】に引き寄せられた雑鬼どもを最初の一撃で仕留め、靄だけを残した。

この靄から主犯を割り出すつもりなのだ。

「さあ、行くぞ」

フォーリンが踏み出そうとした瞬間、靄が徐々に移動し始めた。

それも、靄らしい風のような速さでなく、誘うかのようなゆったりとした速さで。

レジアがひょいっとフォーリンの横に来た。

「さてと、追いかかけよっか。えーっと」

「フォーリンだ」

「んじゃ、フォーリン。行くよ」

レジアがフォーリンを促し、前へ進む。

靄の行き先は依頼者の家か

「多分ね」

刹離の質問にレジアが答えた。

刹離様、フェアリア様。念のため、そのまま融合を解かないで頂きますか？

ヘレスが問うた。

「そのつもりだ。」

フォーリンはあっさりと承諾した。

有難う御座います。では、参りましょうか

フォーリンを先頭に一同は依頼主の家へ向かった。



### 第3話 融合（後書き）

登場人（？）物

名前：ヘレス

性別：？？？

鬘：薄藍

瞳：褐色

服装：獣ですから  
切に思う

性格：大人、主人を何より大  
レジア

長さ：638センチ

体重：計ったことがない

足：47センチ

武器：翼、爪、蛇体、

等々

特徴：龍鳳族の一匹。龍と鳳凰の特徴を合わせ持つ貴重な種族。

見た目も美しく、神界でも一目おかれている。

一言：私如きが一言話していいなんて、そんな、貴重なお時間を割いて申し訳ありません。

そして、有難う御座います。これからも私たちをどうぞ宜しくお願いいたします。

## 第4話 依頼人

「ここか・・・」

レジアが目の前にある屋敷を見上げて呟く。

屋敷は、敷地が広く、見た目的にはかなり古いものだった。

《あ、来た来た。ほな、中入りい》

突如全員の頭に直接響いた関西弁。

一同哑然。

《とりあえず、話は中でや。外は悪意で満ちとるさかい、気持ち悪うてかなわん》

「・・・じゃ、とりあえず入っとくか」

数秒の間を置いてレジアが言う。

フォーリンが先頭を切って門を開いた。

玄関の戸を開けた瞬間、フォーリンの融合が解けた。

「・・・助かった。また頼むぞ」

任せてえ 刹離のためだものお。また呼んでねえ

フェリアは指を鳴らすとフツと消えた。

刹離はフェリアの消える瞬間を最後まで見ずにさっさと前へ進んでいた。傍らにいる刹羅もまた同じだ。

レジアとヘレスは刹離たちが先に行ってしまったことに気づき、小走りで追いつく。

「なあ刹離、なんで融合解けちゃったの？」

歩きながらレジアが質問する。

「大神の前では融合した姿・偽りの姿は決して許されぬからだ」

即答した刹離は奥の扉に手をかけていた。

「おい、大神って」

レジアの言葉を見殺して刹離が扉をあけた。

刹離は、中にいる人影を見て、片膝をついた。刹羅は飛ぶのをやめ、地に足をつけて頭を下げる。ヘレスも刹羅に続いた。  
レジアはただ一人、瞠目している。

中にいた人影、それは  
三大神の一人  
火を  
司る戦の神  
ars  
マース

「よう来たなあ。ほな、もつと中入りや」

椅子に深く座り、頬杖について笑顔で手招きする大神。

通常大神とは人界に姿を見せることは、世界の均衡を乱すようなことがない限りは無いといってもいい。

その大神が、今、刹離たちの前で寛いだ風情で手招きをしている。

「失礼いたします」

一番冷静だった刹離が軽く一礼し、奥へ進む。

それに、レジア達が続いた。

「三大神のお一人、マース様。私は、神々の眷属、死神の、名を

—

「刹離、やる？知つとるで。神界では殺し屋や悪魔や、なんていわれて有名やから」

普段は自分のことえお【我】という刹離だが、さすがに大神の前では【わたくし】といっている。

そんな緊張した刹離を、大神はからかうような、楽しげな眼で見ている。

「マース様なんて、そない立派なもんとちゃうし、ま、真の名【グレイス】を呼ぶことを許可したる」

大神とは思えぬ独特の空気感を持つグレイス。

刹離たちが黙っていると、いつまでもにこにこしていそうだ。

「火を司る戦の神……。グレイス、あんた、俺達に真の名なんて

教えていいんですか？依頼もあの霧もなたでしょう？」

真剣な面持ちで尋ねるレジアに、グレイスはフツと笑ってレジアを見据えた。

「<sup>ダンピール</sup>半人半妖君、オレはあの《悪魔に近し神》と呼ばれ恐れられ、仕事も完ぺきにこなしていた刹離をものの2〜3分で式に下した君に興味があるんよ。もしオレに不利益な奴やったら殺すだけやし」  
にこやかに恐ろしいことを言っただけのけるグレイス。・・・恐ろしい・・・。

さすがのレジアも神の行うことまでは予想がつかないため、その言葉にややひるんだ。

「あ、そや」

グレイスが何かを思い出したのか、手を打った。

「あんなあ、依頼も雑鬼もオレが放ったけどな、オレは霧なんて使っただけで？」

「？そんなはずない。俺たちは確かに見たんだ」

レジアとグレイス、会話を聞いていた刹離までもが眉間にしわを寄せる。

そんな三人を見た刹羅が疑問解消の助け船を出してくれた。

我は巧妙に隠されている悪意や殺意をあ霧から感じた。ヘレス、貴様も同じであろう？

刹羅が横目でグレイスを見ながらヘレスに問うた。

はい。私も、僅かながら感じ取ることができました

「じゃあ、霧は誰かの悪の意志の下に放たれたってことかな？」

レジアや刹離が眉間のしわをさらに深めた。

「・・・チッ」

突然グレイスが忌々しげに舌打ちした。

その瞳は火を司る神ならではの紅い炎を映し、静かな殺意を宿していた。

「思ったより早かったな。もう気づいたか」

「何か心当たりがあるのか？」

訝るレジアをちらと見て、先ほどまでよりさらに真剣な表情になる  
グレイス。

「心当たりか……ちやうな、【確信】や」

その場にいる者たちがグレイスの次の言葉を待った。

「ええか？この依頼の内容は、『狩り』や。ある者を狩ってほしい」  
「ある者とは、いったい誰なのですか？」

剝離がグレイスの次の言葉を促した。

グレイスは一つため息をつき、ゆつくりと口を開いた。

「それは、オレと同じ戦の神。いや、血塗れた戦を好む狂神、A r  
e s アレス のことや」

グレイスの言葉を聞き、それ以外の者たちは固まった。

## 第4話 依頼人（後書き）

### 登場人物紹介

名前：マース（グレイス）

性別：男

髪：狸々緋の短髪

瞳：深紅

服装：軽装で特徴がない

性格：ふざけている

が、考えていることは考えている

身長：184センチ

体重：74キロ

グラム

足：27・5センチ

武器：火炎系、

剣、五行術（火・金）

特徴：関西弁を使うために、威厳がないが、三大神と呼ばれる偉大な神。

面倒事が嫌いなので少々他人に押し付ける傾向アリ。

一言：なんや、自己紹介なんてもんやってるん？面倒くさいことしとるなあゝ・・・。

何も言うことない言うつつたやる。とりあえずまあ、よろしく頼むで！！

## 第5話 帰路

「ちょ、まってください。神が敵？私どもに任せるといふことは、グレイス様には不利だということですか？」

刹離が困惑した面持ちで尋ねる。

「神が敵って、刹離も神やる？どっちも立場は変わらんやないか。」

「それは、そうですか・・・」

言葉に詰まる刹離にグレイスはさらに続ける。

「オレは【正】の神やし【負】の気が満ちとるんは苦手やからなあ。刹離とダンピール君ならオレよかよっぽど確実に仕留められるで

多分」

「多分ってなんですか！！」

言い負かされかけていた刹離がグレイスの小さく呟いた《多分》の言葉にくらいついた。

「あゝもゝ、やかましいなあ・・・」

グレイスは大袈裟に耳をふさぐ仕草をしてみせる。

グレイスよ。我らは刹離、レジア、ともに他とは違う大きな力を持つてはいるが、流石に神や上位の妖怪を相手にするのは、それこそ神の助力を乞わねば不可能であるぞ

他の誰よりも冷静にものをいう刹離。

つまり、刹離はグレイスに、神の加護を。と、言外に頼んでいるのだ。

「わゝかつとるって！せやからオレから頼むんやないか。戦の神として、お前らに力を貸そう」

レジアが軽く目を見張る。

普通、神とは実に冷酷かつ残酷で、常に無慈悲な存在なのだ。

しかし、今目の前にいる大神はどうだろう。

こんなにも容易く神の加護をやると言っているのだ。

それを言ってしまう神にも驚いた。だが、驚いた理由はそれだけで

はない。

大神を前にしても、何故刹羅はあそこまで堂々としているのだろうか。

通常の守護獣や式ならば、大神の神通力を前にすることすらできずに、即消滅することは確実だ。

刹羅という姿は真の姿か？否、偽りの姿か・・・。

もしも後者だとしても、真の姿とはいったい？

レジアの思考は、グレイスの声に引き戻された。

「この勾玉を持つとき。それは、持ち主がほんまに危ない時に助けにくるで

多分」

グレイスは、蒼白い透き通った勾玉を前に出した。

刹離は一礼すると、勾玉を受け取った。

その一連の動作の横で、レジアは自分の中の何かが軽く切れる音がしたのをみとめた。

ヘレスが呆れたように半眼になり、レジアの襟首を銜えて半ば引きずるように部屋から退散する。

「っこの・・・、グレイス！！あんたなっ多分とか多いんだよ！無責任な！！いい加減にしろおおおお」

レジアの声が徐々に遠のいていった。

呆れた刹離はレジアの消えた扉に向かって嘆息すると、グレイスに向き直った。

「では、グレイス様、私どもは失礼させていただきます。あ、依頼の報酬は後ほど受け取りに参りますので」

刹離はレジア達の後を追って部屋を出た。

パタン

戸がゆっくりと閉じられた。

「はあ~~~~・・・」



剎離たちの気配が完全になくなったのを確認し、グレイスは最大級のため息とともに椅子に深くもたれかかった。

「はは……。剎離はなんの障害もなく仕事をこなせると思っとなあ……。」

椅子にもたれたまま上を向き、誰に言うでもなく呟く。

「さてつと　　。。。」

もう一度椅子に座りなおし、気を入れなおした。

「我が同胞、Artemis アルテミス よ。私の声に応え」

グレイスが指を鳴らした。

すると、数秒の間において、映像だけの姿がグレイスの前に現れた。それを見たグレイスは、ふっと懐かしそうな顔をしたが、その顔はすぐに緊迫感を帯びた表情に変わった。

「久しぶりやなあ、アルテミス」

「ああ。久しいな、グレイスよ。何か用か？」

グレイス、と真の名で呼んでくる女性は、姿に合わない鋭い口調だった。

薄めの紺色の長髪を長い紐で右上に束ね、動きやすそうな格好に、両手には剣が握られ、背に大きな猟銃が担がれている。

整った女性らしい顔立ちのアルテミスの周りには、何故か大きな狼が三匹うろついていた。

「実はな、狩りと月の神であるお前に頼みがあんねん」

「お前が他者に頼むか　　。。。。まあ、久方ぶりの同胞の頼みだ。聞いてやろう。言え」

アルテミスの答えに満足そうな笑みを見せ、グレイスは頷いた。

「助かるわあ」。あ　　。。。。」

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

刹離たち一行は、鮮やかな夕日の差す道を進んでいた。  
グレイスのもとにいたとき、実は、彼の創り出した異界にあの屋敷の玄関が直接つながっていたのだ。

神の創り出した世界と人界は、時の流れが大幅に違うのだ。現に10分程度で昼が夕方に変わってしまっている。

神々は皆長命だ。不死身というわけにはいかずとも、人間よりは遙かに長い年月を過ごしている。ダンピールであるレジアもまた、例外ではない。もちろん、刹羅・ヘレスともに、人外のものは基本的に半不死身といっていい。

特に神の長寿の理由は、こういった異界に身を置くことが多いからだろう。

「なあ刹離、勾玉って一つしか貰ってないんでしょ？」

レジアが聞く。

「うむ。一つしかない」

手の中にある勾玉を再度確認して刹離が答えた。

「困ったなあ・・・」

どうかされましたか？

ため息交じりに言うレジアをヘレスが気遣う。

「ん？あんな、敵と戦うことになったとしてだ。もしも別行動がやむを得ない状況になったらどうすんのかなって思ってたさ」

「確かにそうだな・・・」

刹離がレジアの言葉に頷く。

それだけではないぞ。我々はこれから帰路につくのだぞ？神界と人界に分かれるのだ。それこそ今決めねばならん

「・・・」

刹羅の正しい意見に対して、しばし沈黙が起こった。

しかし、その沈黙を破ったのはレジアの気の抜けた声だった。

「ま、とりあえず俺の家でいっか」

「そうだな。お前が神界へ行くことは少々骨が折れる。我が人界に

残る方が得策であろう」

剎離とレジアは二人でさっさと合意し、レジアの家へ向けてとつと歩いて行ってしまった。

二人の数歩後ろから二匹がついていく。

あの二人、剎離は神であるが、一応女子であるぞ？我々がいるから安心しているのか……。いや、でもお互いの性別くらいわかっておるであろうし……。そもそも我は剎離の親代わりなわけで……

ぶつぶつと愚痴を並べながら獣の顔でできる限りの渋面をつくる剎羅。

剎羅のそれを見たヘレスはなんだか楽しい気分になった。

そんな一同を見る一対の漆黒の瞳があつた。

それは、嘲笑するかのように高々と鳴き、空高く飛び去った。

へエえ　　マース様八他ノ神、サラニハ半人半妖ニマ

デ助力ヲ乞フノカあ

ソノヨウダ。我ガ手下ノ鴉ニ偵察サセタ

トコロニヨルト、仲良シゴツコガシタイラシイ

光りの全くない暗闇の中にくつくつと笑い声が響いた。

ハデス様、ソロソロアタシガ出テモイイ頃カシ

ラ？

二つの声しかしていなかった暗闇に、女性のものらしい声はいってくる。

アア、\*\*\*カ。ソウダナ。奴等ヲ樂シ

イパーティーへ招待シテ、一番手トシテ出迎エテヤレ

ハアイ 任せテエ

楽しげな三つの声が暗闇の中に響き渡った。

## 第5話 帰路（後書き）

一気に更新してみました……。

いやあ、読むの大変でしょうね、とか思ってみたり（ー；）  
書くの大変でしたよ？ホントですよ？

まだまだぐろてすくなところはでませんよ（^-^）

これからまた刹離たちも・・・特にレジアが・・・

レ）俺が何だつて？

いえ、何も。

レ）なんか言っただしょ・・・

いやいや・・・。そんなことより、リア友から質問来てるよー！！

レ）やった。で、何？

『刹離を式にしたってことは、可愛かったってことですか？（1話参照）』だって。

レ）そりやもう、死神じゃなくて、天使って感じ！！可愛くて可愛くて可愛くて・・・（以下略）

ゴッ

レ）いってえ！！何もグーで殴ることないじゃん！！

離）貴様、少しは黙ることができんのか？！絶対馬鹿で軽い男でキヤラ設定されるぞ？！

レ）えっ……

とにかく、頑張りますんでよろしく……

## 第6話 Party 開演（前書き）

読んでくれてる、その貴方!!!

感謝です（^v^）

## 第6話 Party 開演

\*\*\*\*\*次の日の朝\*\*\*\*\*

「あゝあ！俺の式でも探せないのか・・・」

現在レジアたちは人通りの少ない一本道を歩いている。

と言っても、この時間だ。人通りがある方が変だ。

昨日靄の出現した場所で、少しでも敵の気配が残っているうちにと、早朝から敵の悪意の軌跡を追っているのである。

レジア達の足元で地面をうろろして焦っているのはレジアの式であり、最も妖気や霊気の類を察する能力に優れている『犬丸』である。

名前のとおり、ぱつと見はかわいらしい子犬のようだ。そう、ぱつと見は。

正面から犬丸を見ると、大抵の人は悲鳴を上げるか、卒倒するかのどちらかだろう。

レジアにとっては可愛いペットらしいが、犬丸には朱と藍の瞳が二対ある、真正正銘の妖だ。

「此奴が無理なのであれば、我にもできないだろう。神通力を追うならできるが・・・」

刹離が腕組みをして低く唸った。

「・・・つく、ぐすつ・・・おかあーさあーん！！！！ひつく・・・」

突然、刹離の耳に突然すすり泣く子供の声が聞こえた。

すかさず刹離が子供の方に駆け寄る。

ちなみに、今日も刹離はレジアによって人間にも見えるようになっている。

「迷子か？」

子供は女の子だった。腰に着くぐらいの珍しい深緑の髪をした可愛らしい女の子に刹離は短文で子供に訪ねた。

女の子は一瞬キョトンとした顔をしてから、泣きはらしたような瞳で刹離を見上げた。

「おねーちゃん、だあれ？」

「あ、怪しい者ではないぞ。．．と、とりあえずだな、迷子であろう？母を探すのだろう？」

「うん、おねーちゃん一緒に来てえ」

泣き疲れているのだろう、女の子の声はやけに間延びし、とても覇気が感じられなかった。

女の子は刹離の服の裾をきゅっと握り、刹離を見つめた。

「しょうがない、行くか」

数歩下がって事の成り行きを見ていたレジアが刹離のそばへ来た。

刹離とヘレスは、女の子に神通力が当たってしまっではいけないのでやや離れて見ている。

「道に心当たりはあるか？」

「うん。おねーちゃん、多分こつちい．．．」

女の子はさつき来た道を指差した。

「そうか、では、行くぞ」

「うん」

行くぞといいながらも、刹離はなぜか女の子に半ば引きずられるように歩いた。

\*\*\*\*\*



「なあ、本当にこっちであってるの？」

違和感を感じたレジアが女の子に聞いた。

刹離たちは女の子の言うまま歩き、いつのまにか見知らぬ場所まで来ていた。

疲れていたように見えていた女の子は、今では元気に刹離の数歩前を歩いている。

「うん、絶対あってるよ」

やけに自信にあふれた少女の言葉に刹離が疑問をもった。

「わかつているのか？」

「おかあさんにおしえてもらったの」

女の子は嬉しそうにスキップをしながら刹離に言う。

「何を教えてもらったのだ？」

「おそらをみながらかえりなさいって」

「なんで空を見ながらなんだい？」

刹離たちの会話にレジアが入ってきた。

「だってね・・・」

突如、空の色が不気味な赤黒い色に染まり、周りの景色の明度を急速に落とした。

空気が重みを増し、絡みつくような粘り気を帯びる。

「だってねあのおそらはちのいるなんだ。【あたしが一噛みするだけであくさんでるんだよ】」

女の子の声がいきなり若い女性の声に変わった。

赤黒い空はそのままに、いつの間にか刹離たちは無限に見える部屋のようなところに立たされていた。

ただし、一角に人一人が通れるくらいの階段が見えるため、空間が無限でないことはすぐに分かった。

それに続いて、不気味なほどに満面の笑みを浮かべる少女の、顔が、腕が、足が、腹が、シュルツと紐が解けたように崩れ、無数の蛇と

化した。

今はとても少女とは呼べないものの近くにいた刹離は飛び退り、レジアの横へつく。

「まったく、こんな簡単に誘われてるんじゃないじゃ、あんまり楽しいパーティーは期待できそうにないわね」

奥から声の主らしき女性が歩いてきた。

「あんな朝早くから子供がいるわけないのにねえ ふふっ」

女性は、短いスカートと、袖のやけに長い服を身にまとい、とても長い、黒みがかった緑の髪を幾本かに分けて束ねている。

周りには、少女だったものがしゅるしゅると踊るように群がっている。

「ようこそ、ハデス様の創った異世界へ さあ

パーティーを始めましょう」

女性は先ほどよりもさらに楽しげに、ひどく優しく言った。

## 第6話 Party 開演（後書き）

さて、ばあていが開演しちゃいましたよ。

これから色々と壮絶な感じになります（――；）

緊迫感とか、しっかり出せるかなあ・・・。

この小説の作者は、感想・評価等いただけると、有り得ないほど喜びます。

適度に餌付けしてやってください>（――）<

## 第7話 Party 2

クツクツクツ……。ハハハハッ！！！！！！

刹羅の嘲笑が響いた。

ヘレスも同様に小さく笑っている。

余談だが、ヘレスはこの時初めて人間の『肩』という部分を欲しいと思った。

もし自分になれば、震わせて笑ってみせるものを。

女怪ゴルゴンの分際で、我等に刃向うなど、格の違いを知れ

怖ろしいまで冷え冷えとした視線を女怪に向ける刹羅。

「アラ、舐めないでよ？今はゴルゴン三姉妹は融合してるし、なんつたって今のアタシにはアレスとハデス様の御加護があるんだから」

冥府の王、ハデスだと？！

ハデスの名を聞いていなかったレジア達は多少驚いた。だが、全員動じた様子はない。

しゅるっ

……

女怪の周りに群がる蛇がアレスとハデスの名を聞いて、喜ぶようにより一層大きくうねり絡まっている。

蛇を司る女怪……。貴女は、メドゥーサ……。ですね？

女怪は、ヘレスの言葉に気付き、蛇を腕に絡ませながらまた楽しそうに言う。

「今頃気づいたの？結構有名なのになぁ……。ま、いいや

これから死ぬ奴等に名乗る義理もないし」

まとわりつく空気がメドゥーサの蛇のように絡み合い、メドゥーサの妖気が僅かに上がったことを知らせた。

メドゥーサの周囲に群がる蛇がヘレスを真っ直ぐ見つめては、時折二股の舌をちらつかせ、威嚇の声を発している。

その度に耳を通して鳥肌が立つような妖気が這い上がってくる。  
刹離も、僅かに気圧された。

フツ……。面白い。我が相手をしてやろう。刹離たちは先に行くがいい

刹離はメドゥーサを鋭く睨み据えたまま顎で奥に見える階段をさして言った。

その表情は、余裕とともに、楽しんでいるようにも見える。

では、私も化け物同士、殺り合うとします。私が先に軽く手合せでもさせてもらいましょうか

「ふふふつ、喜んで」

ヘレスの問いにメドゥーサは笑顔で答え、そして異常なほどに口端を吊り上げ、歌うように言った。

「さあ、殺ろうか」

行け！！！！

刹離とメドゥーサの言葉が重なった。

と同時に、メドゥーサから妖気で形成された蛇が放たれる。

蛇は大きく顎門を開き、奥へと走る刹離とレジアに向かっていく。

斬ッ

突如蛇の胴体にぱつくりと傷が開き、蛇は蛇体を大きくくねらせ、苦しそうにもがいた。

私と手合せ……。でしたよね？

ヘレスがメドゥーサを射抜くように睨み据える。

「……。ふふ 上等」

メドゥーサは笑いながら右手をヘレスへと向けた。

その右手から無数の妖気の蛇が放たれる。

ヘレスはそれらを龍の神力で粉碎し、その力をそのまま勢いでメドゥーサへとぶつける。

メドゥーサは神力を蛇で防いだが僅かに頬に傷を作った。

「チツ・・・」

メドゥーサは一度舌打ちすると、妖気ではなく、本物の蛇を召喚し、放った。

蛇たちは、地面を滑るように加速しながらヘレスへと近づく。

ヘレスは神力を蛇に集中させて払い退けた。

が、一匹の蛇の姿が瞬時にメドゥーサの姿へと変化した。

！？

ヘレスは咄嗟に身を守ろうと鳳凰の翼を自分とメドゥーサの間に滑り込ませる。

しかし、メドゥーサは攻撃を防御されたにもかかわらず、にやりと笑って翼に噛みついた。

バサッ

ヘレスは反射的に翼を大きくはたかかせてメドゥーサを振り払った。メドゥーサは振り払われた衝撃で地面を滑り、僅かに体勢を崩す。

すかさずヘレスが間合いを一気に詰め、飛退こうとするメドゥーサの全身を巻き上げ、締め付けた。

貴女は何故アレス様たちの味方に？

ヘレスがメドゥーサの身体を徐々に絞め上げながら言った。

その間もメドゥーサはずっと笑っている。

「つまらない質問ね 面白そうだからに決まってるでしょ」

そう言うメドゥーサの口から、女怪と言えど、その容姿とは明らかに不釣り合いな二股の細い舌がちろちろと覗いた。

！！

ヘレスが上空へ逃れようとメドゥーサを締め付ける力を一瞬弱めた。

「そう、それは分身よん」

ヘレスの胸の内にあるメドゥーサは、先刻の少女のように瞬く間にしゅるっと蛇になった。

蛇はそれぞれにヘレスの胸に巻きつき、一噛み、二噛みと深く喰ら

いついた。

## 第7話 Party 2（後書き）

更新が遅くて申し訳ないです・・・。  
読んでくださっている方、どうか気長に更新されるのを待ってやってください>（――；）<

### 登場人物紹介

名前：メドウス

性別：女

髪：黒みがかった緑の長髪

瞳：濁った金の蛇目

服装：短いスカート、裾の長い服  
する

性格：殺戮を快楽と

身長：162センチ

体重：52キログ

ラム

足：24センチ

武器：蛇、召喚術、

変化、等々・・・

特徴：歌うような喋り方をする。蛇は彼女の友達であり、家族らしい。

蛇に変化する自慢の長髪は、毎日手入れを欠かさない。

一言：ふふっ アタシにもやつと自己紹介の場が・・・

ほおら、蛇ちゃん達 ごあいさつしなさい？ て、何にも話せないんだけどね 爆



## 第8話 Party序章（前書き）

体調不良や、なんやかんやで更新が遅れてしまいました（-\_-;）  
読んでくださっている方！（いるかどうかは怪しいトコロ）申し訳  
ありません！！

頑張って早く更新できるように致します>（-\_-）<

## 第8話 Party序章

ポタッ

ヘレスの身体には、鮮やかな朱色が幾筋かはしっていた。

……。私としたことが、女怪ごときに先手を打たれるとは……

「あはは だから甘く見ないでっば」

悔しそうに顔を歪めるヘレスを見て、メドゥーサが嘲笑するように笑った。

蛇の毒ですか……？

自らの胸の所々にある小さな傷口から流れる血に、異質な色が混ざっているのを見て、ヘレスが問う。

「そう アタシの毒は、即効性が自慢よ」

メドゥーサが嬉しそうに笑いながら自慢げに言うが、ヘレスは苦笑のようなものを浮かべて流した。

刹羅さん、代わってもらえます？そろそろ

「あら？選手交代？いいわよ 誰でも負ける気はしないもの」

ヘレスが後退し、刹羅がメドゥーサと向き合う。

刹羅は自信に満ち溢れた顔のメドゥーサを一瞥し、フッと口元を歪めた。

いいだろう。此の龍鳳族の不意をつけるだけの力量があるのなら、我も些か本気を出すか

刹羅がふわりと飛翔し、メドゥーサをしつかりと見据えた。

メドゥーサは刹羅の言葉に不愉快そうに反応した。

「ちよっと、そのちっちゃいの。あなた、そんな軟弱そうなくせして、でかい口叩きすぎよ？」

あからさまに馬鹿にしたような口調のメドゥーサに、刹羅は怒った

様子もなく、メドゥーサを呆れたような眼で見た。

刹羅は軽く嘆息し、獣の顔をうまく動かし、人間の『馬っ鹿じゃねエの?』といった時のような表情をした。

そうか。神の御加護を受けているにもかかわらず、貴様には私の姿が小さく見えるか。まあいい。どれ、真の姿を見せてやろう

刹那、刹羅から光とも闇ともいえないぬ色を混ぜた神通力が爆発し、メドゥーサとヘレスの視覚を支配した。

神通力によって爆風が巻き起こり、荒れ狂う水のように吹き抜けた。

「なっ・・・あなたは　　?！」

ようやく目を開けたメドゥーサは、目の前にある巨大な影に驚愕の色を隠せなかった。

「ハデス様の狗が何故ここに?!」

ふさふさの濃紺の毛に覆われたたくましい体躯に、巨大な四肢。その先についている爪は黒曜石のように鋭く光っている。

頭は、三つ。大きな口から覗くのは、鋭い牙。血生臭い吐息が狗独特の早い呼吸とともに吐き出される。金色に煌めく三対の瞳は、しっかりと獲物を捉えていた。

冥府の番犬ケルベロス

メドゥーサは、突然の巨大な神通力に気圧されたが、すぐに体勢を立て直し、ケルベロスをしっかりに見据えた。

「ハデス様の忠犬であるあなたが、主人に逆らうの?」

平静を装って必死に問うた。

生憎と、今、我は刹離の忠犬でな

刹羅は皮肉交じりに言った。

ひゃっほおおう!!! 久々の外だあッ!!! あああッ!!! さっそく殺したいのはつけ〜ん!!!

刹羅とそっくりな顔をした右の頭、違う部分は左頬の傷だけの頭が言った。

破滅の頭、騒ぐなよ。殺すだけだ。骨まで砕こうとか考えるなよ  
これまた、刹羅と同じ顔の左の頭、違う部分は右頬の傷だけの頭が  
言った。

フンツ。理性の頭は一々五月蠅えな……。わかったよ！殺すだ  
けにしてやるよ！！

「ちよつと、何なのよ！！……。ま、まあ、その龍鳳族はアタ  
シの毒で動けないんだし」

慌てながらもまだ自信がありそうなメドゥーサ。

ふわっ

優しく、冷たい風が唐突に吹いた。

「?!」

誰が動けないのですか？

風の吹いた方向に身を翻したメドゥーサは今度こそ瞠目した。

目の前にいるのは、毒で仕留めたはずの龍鳳族。

「お前つ……。アタシの毒で、なんでっ?!」

動揺を通り越して、挙動不審になりかけているメドゥーサ。

説明していなかったですね。私は、龍鳳族の中でも特別な『di  
vine whereabouts 神の居場所』なんです  
よ

「な、なによそれ!!」

1000年に一度、優れた者を神の憑代とされるのですが、それ  
が、私に当たるわけです。あ、毒は体内で浄化させていただきまし  
た

ヘレスは数倍あるケルベロスの横に移動した。

御免なさい。貴女には二人もの神からの加護があるようなので、  
加減はナシです

おい。とつとと噛み砕きに行きてえんだけど？

破滅の頭がヘレスを促した。

ああ、すみません。では

メドゥーサが驚愕のあまり顔色を蒼白に変えている中、ヘレスが叫んだ。

遍く龍神に謹誓し奉る。我が身を憑代に。その甚大なる力をお貸しください

d i v i n e a d v e

n t 龍神降臨 !!

直後、辺りを射抜くような神通力の塊がヘレスに降り注いだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9646d/>

---

NecessaryCorkscrew      必然的な螺旋階段

2010年10月11日19時36分発行